

令和4年度 奈良市立西大寺北幼稚園 研究実践概要

園長名 坂上 紀子

全園児数 25名

1. 研究主題

心を動かし主体的に活動する子どもの育成

～自ら考え遊びを生み出す環境構成や援助の在り方～

2. 研究年度

二年度

3. 研究主題設定理由

幼児教育は幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本としている。子どもはワクワクドキドキして思わずやってみたくなるような環境があるからこそ繰り返し取り組む中で試したり、自分なりに考えたり、友達の刺激を受けたりして育っていく。子どもが自らを取り巻く環境に主体的に関わる中で、自分の実現したい思いがより確かなものとなり、子ども自ら遊びを生み出していけるよう、保育者の環境構成や援助の仕方について探っていきたいと考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- 子どもが主体的に身近な環境に関わり、興味や関心を深めながら「おもしろい」「もっとやってみたい」と感じ、自ら遊びを生み出していけるような環境構成の工夫や援助の仕方を学ぶ。

②研究の重点

- 研究主題について共通理解を図りながら遊びの中の学びについて考える。
- 各期の事例を持ち寄り、子どもが自ら動き出すための援助や環境構成について追求する。
- 子どもがおもしろさを感じ、「もっとやってみたい」と自ら環境に関わり、夢中になって遊び込む環境づくりを工夫する。
- 保護者や地域と連携を深め、保育内容の充実に努める。

③活動の方法

_____環境構成 _____保育者の援助_____主体的に関わっている姿

【事例① 5歳児 「人形劇」 6月】

<ねらい> ○ 自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりしながらイメージを伝え合って遊ぼうとする。

- 必要な道具や素材を準備し遊びに取り組もうとする。

・地域の方が人形劇を見せに来てくれ、それを見て「僕も人形劇がやりたい」と話すと早速

どんなお話にするかを考えながらハサミや段ボールカッター、画用紙や紐などの使いそうな物が乗ったワゴンや机を出し、製作コーナーを準備し動物をつくらうとしている姿を見て「私もやりたい」と一緒につくらうとしている。「どんなお話にするの?」と尋ねると、「さっき見たライオンの大工さんの話にしようと思ってる」と答えるのを聞いて「じゃあ、人形劇で出てきた動物をつくっていくね」と素材を選びだした。なかなか友達と関わって遊ぶ姿が見られず、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを感じられるようにしたいと思い「いいね、面白かったよね。二人で一緒につくってみる?」と声をかけた。二人で素材を選びながら「ちょっと待って、出てくる動物は変えたいねん」「そうなんや、じゃあ何つくったらいいの?」「まだ決めてない」と悩んでいる。「じゃあ先にどんな動物つくるか決めてからにしよう。ブタは絶対入れたいねん。人形劇を見てた時からかわいいなと思ってたし、動かすのもやりたい」「それはむり、出てくる動物は絶対違うやつにしたい。オリジナルにしたいから」お互いの思いを出し合い話し合いを重ね、他にもつくる動物を考え「忘れちゃいそうだから紙に書いとくね」とつくる動物の名前を書いていた。「忘れてもすぐに見れるからいいね」と話し、出てくる動物やつくる物を決め、早速必要な材料や道具を準備して作り始めた。家をつくって屋根をつけようとしたときに「それは鳥の家だからもっと鳥っぽくして欲しい」「じゃあこっちの箱に変える?」「箱は変えなくていいよ。そのままでもっと鳥みたいにしてほしい」と何度も話すが「鳥みたいになってどういうことかわからない」とお互いに困っている。「そうや、絵にかいてくれたら分かるかもしれない」と話すと「なるほど、大工さんみたいに設計図をかくってことね。任せて」と紙に家の形をかき始めた。保育者が「鳥が出てくる時計みたいな形ってことね」具体的に子どものイメージを伝えると「そう」と嬉しそうに家づくりを再開した。次の日、昨日の続きをつくっていると「いつお客さんに見てもらおう?」と相談しはじめ「明日とかならできるかな?」「それは無理ちゃう。完成しない気がするし、練習もいるやん」と話す。ほかの動物は誰が動かすのか、お客さんに知らせないと来てくれないことなどを考え、「1日だけ練習する日をつくらう。私緊張するから」と話し「じゃあ、1日は練習する日をつくらうか」と話がまとまり本番に向けて二人で人形をつくっている。

<考察>

- ・自分のイメージしているものを伝えられるように声をかけたり、認めたりしたことで相手に思いを伝えようとする姿に繋がったり、友達と遊ぼうとする姿に繋がった。
- ・素材や用具などを使いやすいように分けたり、分かりやすいように表示を付けたりしたことで、必要な物の準備が自分たちで準備することができた。

【事例② 4歳児 「遊園地をつくらう!」 10月】

<ねらい>○友達に自分の思いを伝えたり聞いたりしながら遊ぶ。

○友達一緒にイメージを広げながら遊びに必要なものを探したりつくったりする。

10月、秋の遠足で生駒山上遊園地へ行く。コロナ禍で遊園地へ行くのは初めてという子どももいた。乗り物を見ながら「乗り物に初めて乗る」「ちょっと怖い」と話している子どももいたが、メリーゴーランド、スインギングベア、SL列車に乗る。お化け屋敷に興味があり、近くまで行くものの怖いという子どももいて、「先生、やっぱりSL列車に乗ろう!」「みんなで乗りたい」と友達と一緒に乗ると楽しんでいる様子が伺え、帰りには「あれも乗りたいかった」「また遊園地いきたいね」「先生、今度いつ行く?」と嬉しそうに話していた。

<スイングベア>

遠足の次の日、遠足で乗った乗り物の写真を見ながら「昨日楽しかったな」「ぼよんぼよんするやつ（スイングベア）が楽しかった」と遊園地の話をしている。「幼稚園にも遊園地があったらいいのよね」と言うと「幼稚園につくったらいいよ」「そしたらずっと乗れるよ」「それいいね」と数人で意気揚々と話している。遊び始めるといつも迷路ごっこで使っていた小さいトランポリンを持って来て「ボヨンボヨンってなるね」ととんで確かめている。そこに、「こっちのほうがスイングベアみたいだよ」と大きなトランポリンを持ってくる。「それいいね」「こっちにしよう」「先生、段ボールちょうだい」「ほら、落ちないように周りに囲いがあったでしょう」「まわり全部段ボールにするの」とイメージを伝えながら話す。大小色々な大きさの段ボールを用意すると大きさを確かめながら周りに囲い始める。全部囲い終わると、段ボールの囲いが高すぎてトランポリンに入れない事に気づき「これじゃ乗れないよ」「入口つくろう」と相談し入口をつくる。それを見ていた子どもも「いすもあったからイスも積み木でつくろう」とカラー積み木を置き飛び跳ね、積み木に座る子、飛び跳ねて揺らす子など役割分担をしながら遊んでいる。しばらくすると「くまの顔は？」
「顔がなかったらダメだね」「誰かくまの顔かける？」「・・・」「僕がかけるからかくよ。だからみんなは色を塗って」と相談しながらつくり「本物みたいに出来たね」と嬉しそうに話す。

<おばけやしき>

スイングベアができて、チケットをつくったり、終わりの合図がわかるように楽器を鳴らしたりしながら嬉しそうに遊んでいる。しばらくすると「これと同じのでもっともっと大きな段ボールが欲しいんだよ」と伝えに来る。「なにをつくるの？」と子どもの思いを聞く。「おばけやしきがつくりたい」と話す。「おばけやしき楽しそうだね、どれぐらい大きい段ボールがいい？」と聞くと、スイングベアの囲いを指差しながら「こんなつながらっている大きいのがいい」「入ったりできるやつ」と話す子どものイメージを聞き「明日用意しとくね」と伝える。

次の日、繫げた大きな段ボールを保育室に置いておく。登園してきた子どもに「こんなぐらい？」と聞くと「そうそう！これぐらい」と話す。朝の支度を終わらせると、「入ってみよう」と段ボールの下から入り嬉しそうにしている。繰り返し出たり入ったりしながら「入口つくらなくっちゃ」と話し、「ここ切って」と保育者と一緒に段ボールカッターで入口をつくる。登園してきた子どもがつくっている姿を見るなり「これなに？」と聞くと「お化け屋敷だよ」と伝えると「やりたいやりたい！」と数名が参加する。「お化けいるよね」「折り紙で折り方知っているよ」と友達と一緒に折り紙を折っておばけをつくっている。お化けや妖怪が好きな子どもは絵本を持って来て「これづくりたい」とからかさお化けを指さし、牛乳パックで足をつくっている。「僕はゾンビになりたい」とゾンビの真似をして驚かせている子どももいる。「入口ってわかるように《いりぐち》って書いておこう」とプラスチックのまるいふたを持って来て「先生《いりぐち》って書いて」と持ってくる。子どもに渡すと、「ここにつけよう」「ここから入ってわかるもんね」と相談しながらつけている。段ボールにお化けかいたら怖いんじゃない？」と友達に提案し、数名でお化けをかき「血が出ていることにしよう」「こわそうだもんね」とお化けに赤色で口から血が出ているようにかいている。それぞれがお化けをつくり、驚かしたり、怖そうな声を出したりして遊んでいた。保育者もお化け屋敷に入り「怖いお化けだ」と一緒に遊びながら子ども達それぞれの工夫を認

めながら入っていると囲いの外からドングリを降らせて驚かせる場面もあった。その日の遊びの話し合いでは「お化けがいっぱいあったら面白そう」「もっと暗い場所がいいね」「明日はもっとお客さんが来て欲しい」と話す。

朝、幼稚園に来ると外遊びにスインギングベア、お化け屋敷などを持っていく。「どこに置く？」と子ども達の思いを聞くと太鼓橋の下を指さし、「ここ暗いからここがいい」「ここにしよう」と準備を始める。自分のつくったおぼけを用意していると「お化け屋敷はいりたい」とやってくる。友達が入口から入ると太鼓橋の上から友達の前にお化けが来るようにタイミングを合わせて落としたり、ドングリが友達にあたって驚くようにしたりしながらお化け屋敷ごっこを楽しんでいた。

<考察>

- ・遠足で友達と遊園地の乗り物に乗って楽しかったことから、自分達でも遊園地の乗り物をつくってみたいという思いがふくらみ、遊園地づくりが始まった。コロナ禍で遊びや家庭での経験違う中で、イメージを合わせることが難しいことも多いが、遠足という共通の経験が、遊びの中で友達とイメージを合わせやすく、自分の思いを伝えたり友だちの思いを聞いたりしながら乗り物をつくる姿に繋がった。
- ・遊びの中で子ども達のイメージや使いたいものを聞きながら遊びの準備をしたことで、子ども達が自分のイメージを形にしようとする姿が見られた。また、園にあるものを使って遊ぶ中で、子どもの遊びを見たり思いを聞いたりしながら「これはどう？」と子どものイメージに合ったものが使えるよう提案してきたことで、園にあるものを考えながら自分のイメージに合うものを探し遊ぶ姿が見られた。

5. 研究の成果

- 幼稚園が安心できる環境であることで、子ども達は自分の思いを素直に表現することができ、友達やものと主体的に関わっていくものと考えている。
- 地域の方との交流で、普段とは違う経験も積み重ねることができ、自ら取り組もうとする姿にもつながった。
- 一人一人の興味や関心を捉え、保育者が子どもの思いに共感しながら意図をもって、必要な環境を準備したり、一緒に用意したりしたことで「やってみたい」「つぎはこうしよう」という気持ちが高まり、主体的に遊ぶ姿へとつながっていく。そのために保育者は、発達段階を捉え、子どもの姿から興味や関心はどこに向いているのか、何を楽しんだり、おもしろいと感じたりしているのかを見取り、思いに寄り添いながら、必要に応じてヒントや認める声かけ、見守るなど、その年齢や場面、ねらいにそった保育者の援助が大切であると感じた。

6. 今後の課題

- 今後も一人一人の興味関心を探りながら、子どもが心を動かし「もっとやってみたい」と感じ、自ら考え遊びを生み出す子どもの姿を目指し、今後も子どもが主体的に関わりたくなる環境構成や保育者の援助の在り方を探っていきたい。